

民俗博物館だより

Vol. 28 No. 1

2001. 9. 15

御墨師 南都北室町 大森枕渡掾製	松壽墨	同小形	子小路	同小形	同小形	同小形	同小形	天柱日	登り龍	松葉	満菊	万年枝	二羽鶴	茶の	武王	天神	福の神	御上墨	御日記墨	壹挺音	四十八文ヨリ	壹貫文造	南都 油煙 御墨所 江戸京橋銀座三丁目 本家大坂屋六衛門	
	仙	同小形	同中形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形
	拾	五	七	十	六	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
	御印	極上折墨	金神信	金鳳凰	大形香迷	鳳池雲	七賢人	御古墨	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形	同小形
	品々	七十九	金兩分	金一分	金一分	金一分	金一分	元禄年中製	金一分	金三分	金三分	金三分	金三分	金三分	金三分	金三分	金三分	金三分	金三分	金三分	金三分	金三分	金三分	

▲慶応二年南都油煙墨価格表 木版刷り 24.8×17.5cm (西川簾行氏蔵)

目次

平成13年度特別展
「なら墨と筆の伝承文化」展によせて 1

民俗資料の聞き書き短信
 34 マキハダ - 県内における栓皮繊維利用の一例 - 4
 35 小麦餅 7

お知らせ 7

「なら墨と筆の伝承文化」展によせて

期間 平成13年 9月22日(土)～11月25日(日) 大宮守人

はじめに

筆と墨と硯は我が国の文化史上記録手段の最たるもので千年以上にわたって不動の地位を守り続けた。全ての営みはこれによって書き画き、描かれてきた。しかし、その評価の中心は上層文化の成果に終始してきた感が強く、支え手の側からの視点は希薄であったように思われる。

平成11年度に廃業した製墨店の製墨用具一式が収集されたが、それぞれの機能や伝承を十分聞けない緊急の収集であった。この度の展示企画では、その追跡調査の意味を持ちながら、奈良の地場産業として長く受け伝えてきた墨と筆に関わる伝承を広い視野でとらえ、奈良に住むわたくしどもの誇りとすべきものを再発見しようとする、郷土博物館としての当館ならではの取り組みの一環である。現在に受け継いだ伝統産業の世界を入口として、支え手＝より多くの人々の営みを意識し、展示資料は墨と筆の製造関係および製品の類と、これによって書き、描き、企画されてきた日常の営みの中にある書の世界の具体的事例とに大別できる。

書き画き描かれたもの

○人々が実用目的で記した筆墨の世界の紹介が目的であるが、図1「春日権現験記絵」と図2「大仏殿虹梁木曳図」が描く生き生きとした往時の人々の働く光景を通して実用の筆墨の世界への導入とする。前者では、鎌倉時代の大工の仕事ぶりを、後者では江戸中期(元禄～宝永)の大仏殿再建時に、3,020tの大屋根の棟を支える2本の大虹梁(長さ23.6m、口元直径1.3m、重さ23t)が日向の国(宮崎県、霧島山白鳥神社境内の巨大松を伐採)から8カ月がかりで数々の難所、難問を英知と努力で解決して木津に陸揚げ、さらに19日をかけて、お祭り騒ぎで人々が奈良へ奉仕の木曳きをする光景をまのあたりにできる。

そのほか談山神社の本殿造営図(永禄二年、重要文化財)や春日大社の造営



図(江戸期)光慶寺計画図、奈良奉行所関連絵図等建築に関わる図面や中世古文書に描かれた簡潔な土地の領有権



に関わる図類には必要からくる迫力さえ感じられる。

また、スミサシ、スミツボ、サシガネによって画かれた世界は、大工の基本技術として我が国の建築技術史上に重要な地位を保ってきた。そうした成果は、結果としての建造物としてしか知られないが、筆墨の別の一世界といってもよく、本県で営み継がれている、文化財保存事業の中にも一貫して見ることができる。

○図3は春日社(現春日大社)の遠国領の一つ「備前国上道郡荒野一所」という領地(慶賀門灯油並びに大般若会料所)の見取り図である。現岡山市の中心部分に比定される簡略なこの図を通して鎌倉時代後期(正安2年)に領地の権益に関わって、かの地との人や物の交流が盛んであった事実が窺える。また今日の兎島半島が当時は独立した島であることなども窺え、後の人々の干拓の努力が現代の景観になったことを如実に示す貴重な歴史資料である。

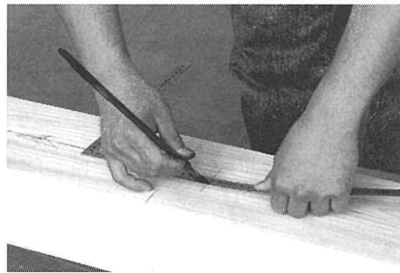
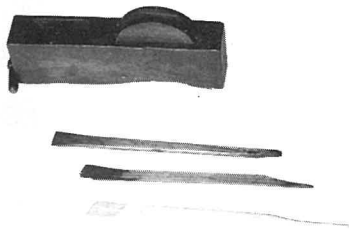
○一方図4は春日社の大和国内の領地である小楊生郷(奈良市柳生町)下村内の字黒爪の見取り図である。各領地の年貢の内容を記した「道教上人寄進神戸田地事」と表題のある一紙文書(応永18年)の部分に描かれたこの図には、簡略な中にも様々な子細のあることが推察される。

図5は「興福寺堂舎図」と表題のあるもので、簡潔ながらも的確さが窺える。現在の奈良県庁や県文化会館を含む一帯の六丁四方は中世以来大和の守護をも自認し権勢を誇った興福寺の旧境内として有名である。図中に文字表記はないが、充実した建物配置などから治承4年、平重衡の南都焼き打ち後、鎌倉初期の復興の様子か、または南北朝動乱期を挟んで応永6年の足利義満による復興後の様子かと推察される。いずれの図も美を意識していない点にかえって力強さを感じさせるものがある。



天曆二年二月に藤原光弘が大和国平群郡夜摩郷に春日大明神を祀る竹林殿造営の光景。サシガネとスミサシ・スミツボで心出し（下）、墨糸を張り墨を打つ（中）光景等がリアルに描かれている。原本の成立は延慶二年（二〇九）、当時の建築工事の様子を知る資料として貴重なもの。

図1 春日権現験記絵 第一巻（春日大社蔵、江戸後期模本）



左、墨壺とスミサシ

スミサシは細かく割を入れた竹製のへらに墨壺の墨を含ませ木材に線を書き込む。反対側は金槌で叩いて柔らかくしてあり、木材に文字を書く。筆の原点の一つがここにある。（松田 豊氏の道具コレクション）

右、墨入れ サシガネとスミサシで柱に刻みの指示線を書き込む。大工の伝統技法は文化財保存事業の中で受け継がれ、実用の筆墨の世界が今日にも生きているのである。（写真協力 文化財保存事務所金剛山寺出張所）

結びにかえて

私どもの日常は、文字と映像とによる架空の世界の中にあると言っても過言ではない。IT革命が叫ばれる昨今、バーチャル世界に飽きたときにも時折、身近な文物のなかに秘められた、物言わぬ物たちから何かを聞き出すゆとり、視点の大事さに気付くことができれば幸いである。

協賛 奈良製墨協同組合/奈良毛筆協同組合
第32回奈良県芸術祭参加

期間中の催し物

◆特別講演会 「なら墨と筆の歴史と伝承」
講師：安彦勘吾氏（帝塚山大学短期大学部名誉教授）
日時：平成13年10月21日（日）（午後1時30分～）
定員等 先着 60名
（往復葉書またはFAXにより9/26（水）から応募受付）

◆体験学習

・「遊墨体験」遊墨パフォーマンスと自由な書の体験
（実費必要、300円程度）

講師 遊墨民 松本頌之氏

日時：10月14日（日） 午後1時から4時頃まで

定員等 先着 40名

（往復葉書またはFAXにより9/26（水）から応募受付）

◆製墨体験「握り墨」

自分の手で握ってつくるオリジナル墨

（実費必要、3,000円程度）

講師派遣 奈良製墨協同組合

日時：11月18日（日） 午後1時から4時頃まで

定員等 先着 40名

（往復葉書またはFAXにより10/16（火）から応募受付）

図2 大仏殿虹梁木曳図（江戸時代、東大寺蔵）



10m余の長大な墨絵淡彩の絵巻には、木津～奈良へ曳く19日間におよそ2万人といわれる奉仕の人々の息吹が溢れる（写真資料提供 奈良市教育委員会）



图3 備前国上道郡荒野一所の図 (正安二年銘 春日社領、個人蔵)

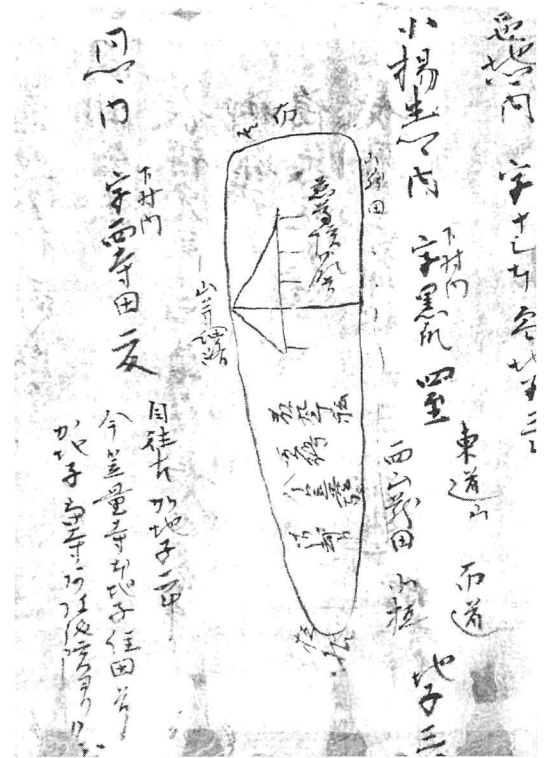


图4 小楊生郷字黒爪四至図
 (「道教上人寄進神戸田地事」の部分、
 應永十八年銘、個人蔵)

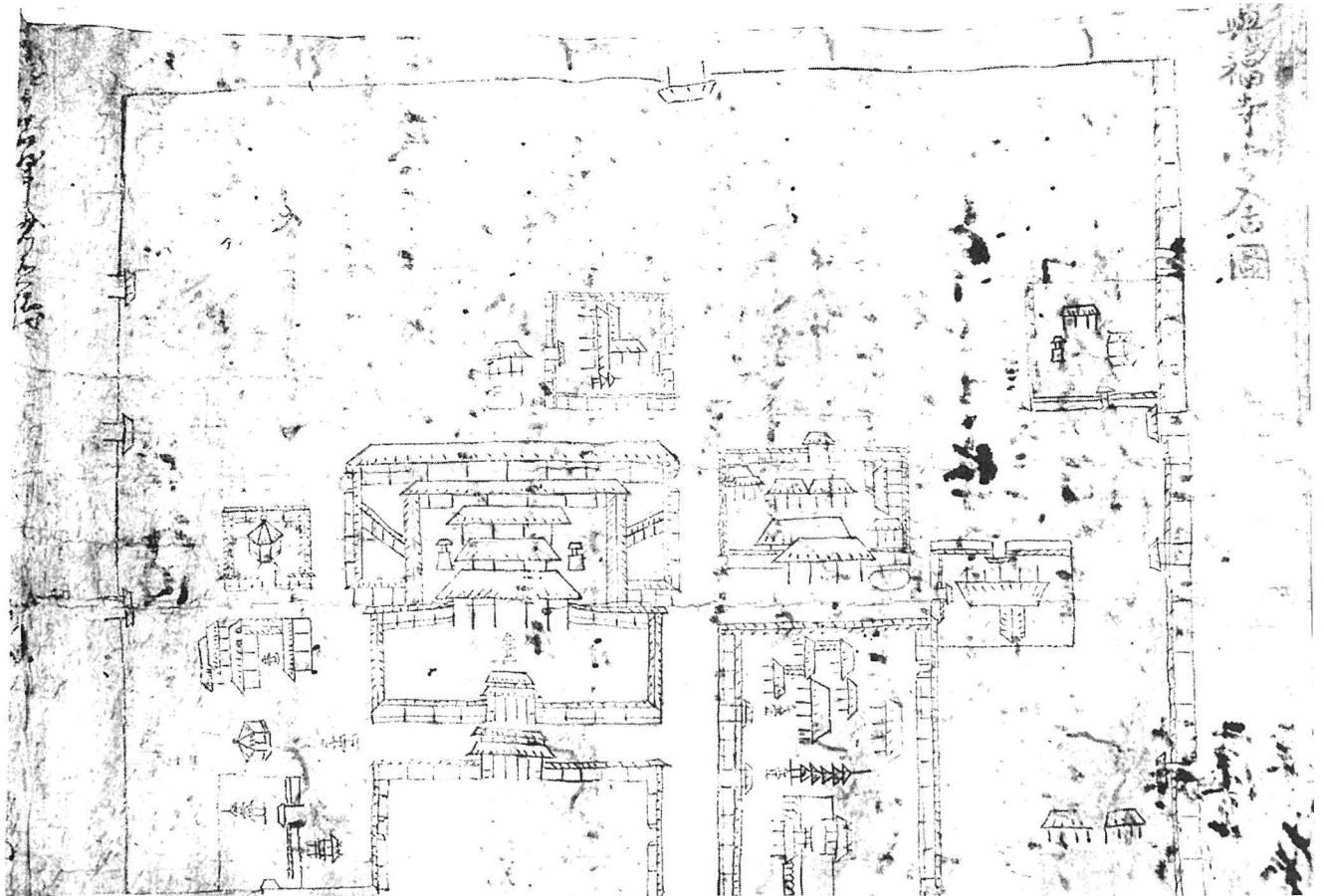


图5 興福寺舎図

マキハダ ー県内における桧皮繊維利用の一例ー

横山 浩子

1. はじめに

ここでは、マキハダについて紹介することとしたい。調査のきっかけは、天理市立北中学校夜間学級の福西由紀子先生からお電話をいただいたことによる。

当館では、収蔵品展「くらしの中の繊維工芸」（平成13年3月24日～9月2日まで開催、展示の概要等については前号参照）において、日常生活で用いられた様々な天然繊維素材について展示紹介したが、マキハダ（原料と製造工程の半製品を含む）をその一例として出陳した。この展示をご覧になった福西先生から、マキハダに関する資料について問い合わせをいただいたのである。

同資料が収集されたのは、当館が開館する前の昭和47年（1972）、収集に際して、当時の調査票の項目に基づいて資料の聞き取り調査が行われており、その記録が保管されているが、当時の製造工程の写真等はない。

福西先生は、当館に電話をいただく以前より既に、桜井市で現在県内唯一の生産者である福土商店を訪ね、また県外におけるマキハダの一大生産地であった広島県豊田郡大崎上島木江町明石の資料も収集されていて、かえって当方が様々なことについて御教示、資料提供をいただいたのであった。

そうした中、福土商店では今年を最後にマキハダ製造の中止が検討されているとの情報を得、改めてマキハダについて調査をさせていただくこととしたのである。

なお、後述のようにマキハダというのは元来槇の木の樹皮で作られるところからの名称であるが、桜井市では専ら桧皮が用いられており、また県外において槇以外にもヒバやアスナロなどの植物が用いられている例もみられることから、ここでは片仮名による表記を用いることとした。

2. 調査の概要

調査日：平成13年（2001）5月16日
 調査場所：桜井市谷仁王堂（マキハダ製造）
 桜井市生田（屋根材製造）
 調査目的：マキハダの製造
 談話者：福土章介氏（錦印マキハダ本舗 福土治三郎商店）大正14年生

マキハダとは、板と板の接合部に充填する防水用繊維のことで、木造船の板の接合部等から水がしみ込み船底にアカが溜まるのを防ぐために用いられるのをはじめとして、箱風呂や、酒や醤油の醸造・貯蔵に用いられる大桶、皮のなめしに用いられる木製の大水槽（関東方面で用いられる）のコーキングなどに使用されたものである。

■桜井におけるマキハダ製造

桜井のマキハダ製造は、もともと高野山のマンニンという在所で高野槇を材料として作られていた技術を、大正期（12、3年頃か）そこから移り住んだモミノキ（樅木？）という人が伝え、当地で材料の入手が容易な桧に材料を変えて製造したのが始まりという。

最盛期は、昭和10年頃～終戦まで。特に昭和12年の日中戦争以降は軍需物資としての需要からその生産が拡大した。職工を抱え自ら工場を経営する卸業者5、6軒、仲買専門業者が2軒、零細な家内工業は約50軒、打ち子、緞い子（後述）等職工は200人に達したという。

昭和初期、大阪電気軌道、現在の近鉄大阪線の敷設工事に、朝鮮半島出身の人々が数多く働いていた。工事が終わるとその豊富な労働力がマキハダ製造へと流入し、この産業を支えたのである。当時マキハダ製造に従事する職方の7割は朝鮮半島出身者であったという。

軍治下の統制や、終戦によるマキハダの需要の激減など時代の荒波の中で、昭和18～20年までに廃業する業者も多かったが、例えば名古屋で下水管の繋ぎ目のパッキングとして



▲マキハダとその原料（桧）

使用されるなど新たな需要もあって、昭和30年代までは注文もあった。しかし、その用途の大半を占めた木造船がマキハダを必要としない強化プラスチック製に切り替わっていったのは決定的な打撃となった。

現在、全国でもマキハダ製造業者は、福土商店1軒である。職人も高齢の絢い子が1人、打ち子が1人という状態となって後継者もないため、今までのストックにより廃業とはならないものの、製造自体は本年で打ち切る予定という。

■マキハダ製造業成立の背景

桜井は、多武峯、宇陀、吉野など周辺に豊富な森林資源を有し、またそれら地域と奈良盆地の接点に位置する木材の集散地であり、製材業をはじめそこで排出される木端や表皮などを利用した曲輪屋、経木屋（鉋屑屋）、桧皮加工業など様々な木工業が成立した。マキハダもそうしたものの一つである。

■マキハダの製造工程

桧は、伐採後空気にふれると急速に皮の赤みが材に付着し、その価値を下げてしまうためできるだけ早く皮を剥く必要がある、かつては剥き子とよばれる皮むき職人が一山いくらずで契約し、3、4人で山にこもって仕事をした。剥いだ皮は、屋根材（桧皮）として利用されるが、このとき除かれるアラカワ（粗皮）の内側の層（福土氏は「肉部」と表現）の繊維をマキハダに利用する。

① 桧の皮はアキムキといって10月～11月に剥いたものが虫が入らずよい。春皮は使えないことはないが、虫が入るのでストックはきかない。すぐに加工してしまう必要がある。また、夏皮は使えないので焚物位にしかない（夏は「皮をむく」とはいわないで「皮をタクル」という）。

ちなみに、桜井の桧皮（桜井皮）の寸法は3尺3寸である。



▲桧皮を天日で乾す

② 皮（生皮）は屋根材加工業者によって、表皮（アラカワ）と肉部に分けられる。

③ 肉部は天日乾燥したのち、マキハダ屋に送られる。

④ ③を夏は6、7時間、冬場で15～18時間、川、または池の水に浸けてアクを抜き（晒す）、再び乾燥する。これをホシカワ（乾皮、干皮）とよぶ。

⑤ ホシカワを室で火にあてて暖める。室は、煉瓦、土で塗りこめた畳1畳分程のもので、これにおが屑を敷き詰め、火を入れる。火の上に鉄の棒数本を渡し、鉄板2枚を敷き、その上にホシカワを並べ、さらに上から鉄板のふたをして暖める。

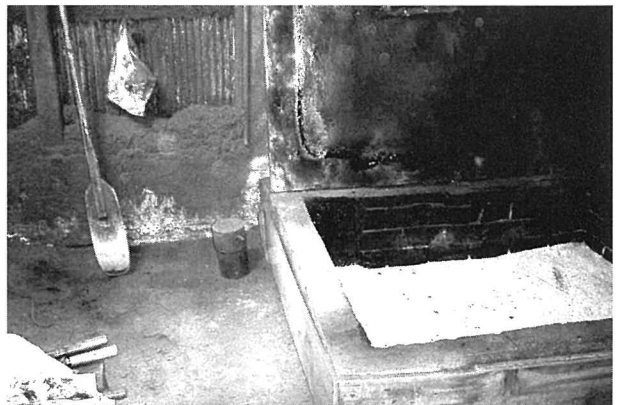
火力は、中の鉄板のすき間を開けたり閉めたりして調節するようになっている。

⑥ 暖めた皮の端1cmほどはアクがでて硬くなるので包丁で切り落としてから、10枚ほど綿テープで束ねて槌でたたき、繊維を柔らかくする（昔は、檜の槌を用いての手作業、現在はベルトハンマーで行う）。

⑦ さらに、1枚ずつ手で揉んで繊維をほぐす。こうしてできたものをウチカワ（打ち皮）という。⑤～⑦までは「打ち子」と呼ばれる職人（男性）が行う。

午前2時頃には、仕事場に入り、室に火を入れるなどして準備し、午前4時頃から本格的に仕事にかかる。午後3時頃には仕事を終える。火を背にしての埃の中での作業で、特に夏場はきつい。仕事を終えると全身土壁を塗ったようになってしまう。

⑧ ウチカワを適当な太さ（2、3cm程）に裂いて縄に縋う。縋った縄は丸棒を2本立てた台に巻きつけてゆく。棒と棒の間隔が縄を束ねるときの長さとなっており、これが規定量に達したら束ね、製品とする。この作業を行うのが「絢い子」で女性の仕事である。この作業は現在では、縄縋い機で行っており、1把の長さも昔のものより長くなっている（1m程）。これを50把束ねて



▲打ち子の仕事場 右はホシカワを暖める室

1束8kgとする。1束約2万円が相場である。

■マキハダの材料と品質

桧皮は、50年～60年生位のものから採取したものがよい。また、同じ桧でも、木材の産地によって品質が違う。多武峯産のものが最も粘り、光沢がある。次いで川上村、西吉野村（旧宗檜村地域）、東吉野村など。同じ吉野でも十津川のは品質では劣る。

マキハダには等級がある。上は肉部だけ正味を使ったもので、風呂桶などに用いる。2等品は外皮との間の赤身の強い部分が残っているもの、3等品はこの赤身の部分を使って作られるもので、火縄（たばこの種火やブト除けに使う）や下水管の継ぎ手の充填材料などに用いられる。

マキハダは、そこにふくまれるヒノキチオール殺菌効果によるのか、何十年たっても腐食しないとされている。

槓で作られたものは、桧よりも繊維が硬く、時間がたつと風化して繊維がこぼれてしまい、詰め込むときぼろぼろになってしまう。また、槓は川船によく、桧は海船に向くともきいたことがあるが、事実かどうかはわからないとのことである。

■桜井で生産されたマキハダの販路

神戸～塩釜、気仙沼、釜石、八戸、北海道根室、網走、小樽まで、太平洋側は殆ど桜井がシェアを押さえていた。

また、船具店だけでなく、和歌山県海南市から野上町にかけての棕櫚問屋の販売網の



▲絢子の仕事場（機械絢い）

せて、全国の荒物屋へも卸していた。これは桶屋などの需要があったためである。

■県外のマキハダ産地

○和歌山県高野山マンニン

3、4軒が家内工業として行っていた。

桜井のマキハダ製造はここから伝えられたものが基という。原料は高野槓（本槓）。昭和17、8年で廃絶してしまったとのこと。

○広島県豊田郡大崎上島木江町明石

19世紀初頭から生産が始まったと伝えられ、終戦以前は10軒ほどが製造していた。

瀬戸内海を中心に、昭和初期には全国の供給の7割を占めたともいわれ、「マキハダ船」と呼ばれる商用船で、同町沖浦、鞆の船釘とともに販売された。

なお、当地のマキハダ製造は、桜井から職人が移り住み伝えられたものともいい、原料の乾皮は桜井から購入して用いるなどその関わりは深い。

現在、マキハダを扱う業者は1軒あるが、製造は既に行われていない。

○石川県鳳至郡穴水

かつては2、3軒あって山陰地方、福井県の敦賀、新潟方面で販売されていた。このマキハダの原料はアスナロである。

○青森市

青森駅の裏で3軒ほどが営業していた。この材料は、ヒバ。東北の日本海側、酒田、秋田、能代から太平洋側の八戸にかけて、北海道の函館以南は青森産のものを使用していた。

このほか、高知県にも2軒ほどあって販路は主に四国であった。

3. おわりに

木材の樹皮利用といえば、桧皮や杉皮作りが代表的なものとして思い浮かぶが、マキハダもまた、江戸時代の和漢船用集などの文献にもその名がみえる伝統的樹皮利用技術の一環である。

福土商店におけるマキハダ製造には、一部簡便な機械が導入されているが、その技術の本質は伝えられている。

ありきたりな言い方だが、先人達が如何に様々な素材の特質を詳細に見極め、余すところなく利用する技術に長けていたか、こうした一連の木材加工をあわせてながめてみると、改めて実感をもって理解することができる。

（参考文献）

『あるくみるきく』255号 昭和63年 近畿日本ツーリスト

小麦餅

浦西 勉

藤本荘司さんから伺った小麦餅の作り方（注1）

小麦餅（注2）

【昔の作り方】

- ①小麦を、唐臼にて水を入れて精白をする。
- ②トーンにてぬかをとる。
- ③小麦だけで一度蒸す。
- ④蒸した小麦を唐臼で搗いてつぶす。
- ⑤餅米と上記のつぶした小麦とを、こしき（セイロ）に入れて蒸す。
今は小麦のつぶしたのを使う。

【蒸す方法】

- ①餅米を前日から水につけておく。夏はよくつかう。
- ②小麦は蒸す前に水に浸して（水を吸わす）しずくをとる。
- ③こしきの下のほうに餅米を敷き、その上に小麦を乗せて蒸す。蒸し上がるまで30分から45分。餅米と小麦の比率は1対1。（下の写真（左））
- ④臼にて塩を少し入れて餅をつく。（注3）

【食べ方】

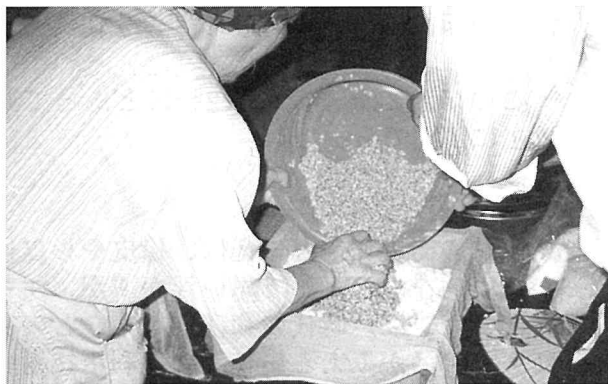
コネ鉢に入れて食べる分だけ、ちぎって、きな粉（豆の粉）をつけて食べる。
七月に作る餅であるが、何日も固くならず日持ちがする。カビが生えてもカビの部分を取り除いて下の方を食べた。

【その他】

六月は麦秋（ムギアキ）と言う。
大麦は六月上旬に取り入れ。
小麦は六月中旬に取り入れ。
田植え時期と重なってとても忙しい。田植えが終わる七月上旬に小麦の脱穀をして、小麦餅を作った。田植え終わりを、「さなぶり」というので、「さなぶり餅」ともいう。

【風味】

あっさりとして、この七月の時期の餅として食べやすく風味がある。



▲こしきに餅米を敷き小麦を入れる。

（注1）

平成13年8月2日（木）に当館において第7回民俗博物館普及講座「食物と伝承文化－小麦餅と亥の子餅－（教材研究）」を開催しました。奈良県の伝統的な食文化、「小麦餅と亥の子餅」を通して、地域の歴史や文化の見方について考える場にしたとして実施しました。この普及講座は、民俗資料の研究を通して教育現場にどのような役に立つのかを検討しています。なを講座内容は次の通り。

作る 小麦餅を作る

（指導 藤本 荘司〔桜井市高家在住〕 農業）

講義 奈良県小麦餅と亥の子餅について

（浦西 勉〔奈良県立民俗博物館〕）

伝統的食物を教材とした環境教育の実践

（森本昭博〔吉野町立中荘小学校〕）

伝統的「食」と環境教育

（本庄眞〔香芝市立真美ヶ丘東小学校〕）

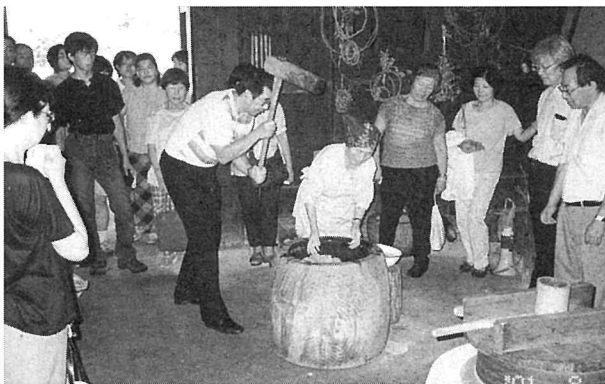
この講座で作った小麦餅について、藤本氏に伺ったことをここに報告しました。

（注2）

小麦餅の作る地域は、吉野郡の吉野川沿い、同郡十津川村、香芝市、北葛城郡当麻町、五條市、高市郡、桜井市などで作られていたことが確認されている。コムギモチの外、アカネコムチ、サナブリモチとも呼ばれる。（『聞き書き奈良の食事』農山漁村文化協会刊参照）

（注3）

「小麦餅」は、餅米と小麦と塩によって作られる。桜井周辺の小麦と塩と油で作られる「そうめん」との関連も考えられる。



▲普及講座 小麦餅を作る。

お知らせ・編集後記

■特別展

なら墨と筆の伝承文化

期間 平成13年9月22日（土）～11月25日（日）

■期間中の催し物

○特別講演会（定員60名）

「なら墨と筆の歴史と伝承」

講師 帝塚山大学短期大学部名誉教授 安彦勘吾氏

平成13年10月21日（日）午後1時30分～

○体験学習（定員40名）

「遊墨体験」

講師 松本頌之氏（書家）

平成13年10月14日（日）午後1時～

○製墨体験「握り墨」（定員40名）

協力 奈良製墨協同組合

平成13年11月18日（日）午後1時～

【申し込み方法は本文2ページ参照】

■常設展

大和のくらしー稲作・大和のお茶・山の仕事ー

開館時間 9：00～17：00（入館は16：30まで）
（民家は16：00）

観覧料 大人200円 学生150円 小人70円

休館日 毎週月曜日

（但し9月24日・10月8日は開館 9月25日・10月9日は休館です）

■編集後記

○訃報。林宏先生（元奈良教育大学教授）が8月6日にお亡くなりになりました。先生は民俗博物館の当初からの運営協議会委員でありました。今でも先生の作られた『民俗資料分類細目』は私どもの民俗資料を分類するための基礎的な指標として使用しています。また、民俗文化財に関して様々なご指導を下さいました。心から先生のご冥福を、お祈り申し上げます。

○特別展が始まります。昨年の「奈良晒」に続き奈良町の伝統的産業「墨と筆」を取りあげます。ぜひご覧下さい。